

鳩山春子・薫の時代

——近代日本の家政書を読む——

上 田 美 和

はじめに

本学、共立女子大学の前身である共立女子職業学校は1886（明治19）年に創立され、創立メンバーの一人に鳩山春子（1863-1938）がいた。春子は、東京専門学校（現・早稲田大学）長・衆議院議長を務めた鳩山和夫（1856-1911）の妻であり、戦後総理大臣を務めた一郎（1883-1959）の母である。

春子は信州松本の多賀家に生まれ、官立竹橋女学校を経て東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）英学科を卒業した。成績拔群だった春子は、同校在学中に、文部省の推薦でアメリカ フィラデルフィア女子師範学校への留学が決まっていた。しかし、文部省の財政困難を理由に、直前になって留学を断念するという出来事があった。春子の自叙伝には「政府の都合（女子の米国教育に反対者閣員中に在りし由にて）」とある¹。卒業後は母校で教師をしていたが、婚約中の鳩山和夫と1881年に結婚した²。次男秀夫の生後4ヶ月の頃、文部省の要請を受け、新設の高等女学校（母校から分離した）教師に復職した。これが機縁となり、1886年に共立女子職業学校の設立発起人の一人となったのである。春子は語学に優れた教育者であり、多数の書籍を刊行した。たとえば1887年出版の『英和対話書』は、夫の和夫が補助役に回った、春子編纂の英会話の辞書である³。夫の死去後、意気消沈する春子に、当時の手島精一校長は共立女子職業学校家庭科の新設等の要職を任せた。「心機一転、再び身を教育界に投じて女子教育に^{じんすい}尽瘁されつゝある鳩山女史」と笑顔の写真付で報道されたりした⁴。1922年に春子は同校長に就任し、翌年の関東大震災で甚大な被害を受けた共立の再建に、粉骨碎身した。

春子の長男、鳩山一郎の妻になった女性が、寺田薫（1888-1982、通称薫子）である。薫は、春子の姉（すま）の娘（いく）の娘である。つまり、薫の祖母が春子の姉であり、春子から見れば、姪の子どもが薫である。横浜地方裁判所判事の寺田栄の長女として横浜戸部に生まれた薫は、子ども時代に母親を亡くし、祖母（すま）に育てられた。薫も弟妹の世話をして成長した。春子は、母のいない薫を親戚として気にかけて、一郎・秀夫とは幼馴染のような関係で育った。薫は女子学院英語科在学中の1905年、鳩山家の養女に迎えられた⁵。1907

年、女子学院を卒業した薫は、小石川高田にある女子教育塾「プラクマ・ホーム」で寄宿舎生活を送り、春子の友人でもあるアメリカ人女性教師から英語・ピアノ・料理を習った。1908年、薫は一郎と結婚し、のちに一男五女の母となった。1938年3月、春子は共立講堂の落成の日に倒れ、帰らぬ人となった（校葬は新築の共立講堂で行われた）。薫は、春子の後継者として共立女子学園長に選出された。一郎は自由主義者として著名な政党政治家だったが、戦後公職追放の憂き目にあう。さらに1951年、脳溢血で倒れた一郎の、政界復帰を支えたのは薫であった。1954年、一郎の内閣総理大臣就任により、薫は“ファースト・レディー”となった。鳩山内閣は保守合同、日ソ国交回復や国際連合加盟を果たした。薫は政治家の妻として活動するとともに、93歳で亡くなるまで本学の教育を支えた。

春子と薫は、一郎の選挙運動を実質的にとり仕切り、当時の政界では姑と嫁の名コンビとして知られた⁶。「春子さんも偉かったが、薫さんも偉い。前者が剛なら、後者は柔」と評された⁷。薫は春子の意を十二分に汲み、二人は実の母娘のように、“良妻賢母”に徹する一生を送ったのである⁸。

1917年、春子と薫は、家政学に関する共著『家政』を出版し、当時のベストセラーとなった。高橋節子（前・本学家政学部教授）は、『家政』を日本家政学史において、「日本の家政書」（後掲分類C）に該当する著作とし、次のように評価している。「女子教育の奮わない時に一般家庭の子女を対象に教養と道徳性を説き、女性の生活者としての地位向上に貢献した」⁹。

そこで本稿では歴史学の方法によって、家政書および家政学成立の時代を考察し、春子と薫の家政書にあらわれた思想について論じることを目的とする。

1. 日本における家政学の成立

家政学は明治時代に学問として成立した。常見育男『家政学成立史』は、明治時代の家政書を次の三つに分類する¹⁰。

- A. 伝統的家政書：江戸時代の家庭経営を継承したもの。
- B. 翻訳的家政書：外国の家政書（home economics/domestic science）を翻訳・意識したもの。
- C. 日本の家政書：AとBを折衷したもの。明治中期以降に多い。

近世の家庭経営には「家治」「家斉」という語が使われ、男性による家経営^{イエ}という側面が支配的だった。近代以降、女性を主眼におく「家政」「家事」を冠する書物が出現する¹¹。

本節では、明治時代に出版された代表的な家政書にあらわれた“家政”と“女性”の位置を確認する。

(1) 文部省編輯局『家事要法』(1881年)

まずとりあげるのが、1881(明治14)年に出版された文部省編輯局・海老名晋訳『家事要法』である。本書は前掲分類Bに該当する翻訳書で、原著はビーチャー・ストウ姉妹による共著、*Principles of Domestic Science* (1870)である。アメリカで刊行された本書は、キリスト教の立場から書かれ、世界で最初の家政書といわれている¹²。姉キャサリン・ビーチャー(Catharine Beecher, 1800-1878)は女子教育に従事した。ハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe, 1811-1896)は、「アンクル・トムの小屋」(*Uncle Tom's Cabin*, 1852)の作者であり、奴隷制撤廃運動に尽力した。

『家事要法』は本書の目的を次のように説明する。

本書ノ著者ハ深ク世ノ婦人ノ不才不幸ヲ憐ミテ之ヲ済救スルニ聊^{いささ}カ微力ヲ尽サント欲シ…人生居家ノ職務ト荣誉トノ蔑視セラレテ婦人ノ其職務ヲ学フコト男子ガ戸外ノ職務ニ於ケルカ如クナラズ、…家事ノ賤業ト視^{みな}做サル、ニ至リ…¹³。

つまり、著者は、女性を才能がなく不幸な存在としてみており、救済のためにこの本を書いた。また、家事は外で働く男性の職務とは異なり、“賤しい”仕事とみられていたことがわかる。

しかし、著者は次のように主張する。

本書ヲ著スノ趣意ハ他ナシ、即チ、齊家ノ困難ニシテ而シテ貴重ナル事務ニ関スル一切ノ職業ヲシテ十分ナル荣誉ト報酬トヲ受ケシメ、以テ婦人ノ本分タル各科ノ職業ヲ男子ノ最モ尊フベキ業務ニ等シク冀フベク敬フベキ者タラシメントスルニ在リ¹⁴。

家事は男性の職業と同等に敬意を払われるべき仕事である、と認められることを願って著者はこの本を書いた。ここには“家事は女性の本分である”という見方が示されているが、ビーチャー・ストウは、家事の地位向上によって女性の地位向上を目指したといえるのである。

(2) 瓜生寅『通信教授 女子家政学』(1889年)

次に1889(明治22)年刊行の瓜生寅^{うりゅうはじめ}著『通信教授 女子家政学』である。本書は通信教育講座のためのテキストであった。瓜生寅(1842~1913)は幕府の英語教師だったが、語学力を生かして明治新政府の官僚・実業家として活躍した。前掲分類Cに相当する本書は、ビーチャー姉妹の著作の引用も行いつつ、衣生活や台所に関して日本の実情に合わせた内容となっている。本書は、「人に男女の別あるは譬^{たとえ}は猶ほ天と地のあるが如し」¹⁵と両性の差

異を明記するところから始まる。

各其用ありて相待ち相扶^{たすけ}て此世界を為すものなり。然れバ男子は外を務め女子は内を治めて各其負担^{うけもち}の職業^{やくまへ}を十分に為遂げ相共に力^{あは}を協せされバ到底その国も家も繁昌は致し難く万国と肩を並べんことは思も寄らぬことなり¹⁶。

本書は“男性は外、女性は内”という典型的な性的役割分業の本かというところ、必ずしもそうではない。

我邦は中昔より支那の教の誤を伝て女子は智なきを以て徳とす^{などとな}杯稱へ一切これを一室の中に閉込め或は之を打捨置て物事を知らしめず男尊女卑の風習^{ますます}益^{ますます}偏固となり終には女子自らも愚痴無智は女の常なりと甘んじて…如何にも口惜き次第ならずや¹⁷。
必竟世の人か^{これまで}従来^{これまで}の風習に心曇りて一家の内政^{それぞれ}各般^{それぞれ}の事務の尊むべきとその職業の重んずべきとを知らずして之を輕蔑するが故なり¹⁸。

つまり、男尊女卑の風習は、中国の儒教を誤って伝えた悪弊であり、女性は無智でもよいという考え方は、家政の重要性を輕蔑したものだと言及。本書の立場は次の叙述にあらわれている。

一家の政府も一国の政府と^{こと}殊なることなし。一家の政府の総理大臣たるものはその家の主婦なり¹⁹。

家父長制は明治期に法的にも強化された。明治民法は民法典論争を経て1898年に確立するため、本書はそれ以前の出版である。しかしそれを考慮しても、一家の総理大臣は主婦であると言及、主婦を家庭のリーダーと位置づけていることがわかる。

ただし、その一家のリーダーとしての役割は次のように、家族への献身であると説かれていた。

一家の主婦の第一の職掌は先づ自ら己に打克てその私情を忍び一家内中の人人を引き立て之を教へ導き又各その己を棄て…²⁰。

しかしながら本書が、家政の価値を捉え直すことにより固陋を打破し、家政と女性の地位を高めようという意図のもとに書かれたことは理解できるのである。

(3) 下田歌子『家政学』(1893年)

下田歌子(1854-1936)は、欧米教育視察経験をもつ女子教育家であり、華族女学校(女子学習院)、実践女学校(実践女子大学の前身)の創始者でもある。今日では、彼女の保守性が指摘されるが、当時の社会に与えた影響力は絶大だった²¹。1893(明治26)年に出版された『家政学』は、当時華族女学校校長を務めていた西村茂樹が序文を寄せている。上下巻にわたり、衣食住生活の各分野について、西洋の事情も含め、詳細な解説を行った大著である。家具や調度品の配置や配膳法などの図説も豊富である。前掲分類Cに相当するといえよう。

家政を主るものは、先能く、温和貞淑なる婦徳を備へざる可らず。…内政の整はざるは男子の過ちにあらずして、その責、女子に在りといふも亦、誣言にあらず。男子の外を治め、女子の内を守るとは、真に、天賦の職分なれば、女子たらん者は、たとひ、万巻の書を読み、百科の学を辨らめ、各種の芸に長けたりとも、一家の事を理するに拙く、内助の功尠からんには、決して、良妻賢母とは、称す可からず。家政の事は、その執る所、極めて卑近にして、其績の顕るゝ所、少きに似たれど、其本分を尽すに於ては、男子の国事に勤むると、敢て、異なる所なし²²。

下田は、温和貞淑であることが「婦徳」であると述べ、「内助の功」が「良妻賢母」の条件であると主張する。また、家政は「極めて卑近」だが、女性の天職であると述べている。下田は、女性がつかさざる家政を、あくまでも外で働く男性を支えるためのものとして位置づけている。前に紹介した瓜生の“一家の総理大臣は主婦”という主張に比べ、女性と家政の地位は後退した感がある。

以上、明治時代の代表的な家政書をみてきた。いずれにせよ、家政という分野は近代の産物であることがわかる。こうした時代を経て明治から大正期に入り、鳩山春子・薫による家政書が登場するのである。

2. 鳩山春子・薫による家政書

明治時代の後半に、近代女子教育の場としての高等女学校の数は急速に増加した。『共立女子学園七十年史』によれば、日清戦争後には全国に19校だった高等女学校は、日露戦争後には100校に達した。共立女子職業学校は、「主婦の品位を高める」という社会の要望に応えようと、高等女学校卒業者にさらに二年間の教育を行う新課程「家庭科」を1912年に設置した。学園長手島精一の依頼を快諾し、家庭科の主任に就いたのが、前年に夫を亡くしたばかりの鳩山春子であった²³。

私が良妻賢母と唱へますのは単に理想ばかり高く、学問許^{ばか}り出来るのを指すのではあり
ません。それでは到底一家の主婦となるべき資格がないと思ひます、そこに鑑みる所が
あつて…真の良妻賢母を養成する目的を以て此家庭科は生れた訳で御座います²⁴。

明治から大正への過渡期に誕生した共立の家庭科は、やがて「花嫁学校」としての地位を
獲得していく。家庭科の新設に伴い、共立女子職業学校の学則第一条は次のように変わっ
た。

本校ハ女子ノ職業又ハ家政〔下線部引用者〕ニ須要ナル技芸及ヒ学科ヲ授ケ兼テ之カ教
員タラントスル者ヲ養成スルヲ目的トス²⁵。

下線部が新たに追加された部分である。すなわち、共立では家政が職業と対等の重要性を
もつものとみなされるようになったことを意味する。やがて、昭和初期の1928年3月まで
の共立の卒業生総数では、家庭科が他科を凌ぐようになっていた²⁶。

本節では、鳩山春子と薫が明治時代末期から大正時代に出版した著作を読み解いていく。

(1) 鳩山春子『婦人の修養』(1907年)

鳩山春子の単著『婦人の修養』²⁷は、それまでに新聞・雑誌のために執筆した記事を集成
したものであり、以後も版を重ねた。推薦の序文を大隈綾子（大隈重信夫人）らが寄せてい
る。この本は、衣食住生活を教える家政書とは異なり、女性の社交術に関する実用書であ
る。本書が扱う社交は、書簡の文例、礼儀作法、接客、子どものしつけ等、詳細にわたる。
この本を「既に一家をなせる人」のために書いた、という春子の説明からして²⁸、主婦の読
者が想定されていた。春子は1901年、和夫とともに欧米旅行をしているが、その際に得た
知見を生かしており、たとえば書簡の手本は和英文両表記である。

春子は、客間に招かれた際の注意を次のように書いている。

家具、絵画、其他の物を凝視すべからず。同席の人を凝視する如きは、勿論無礼なり²⁹。

「契約と結婚」の節では、欧米の婚礼について解説した後、日本の婚礼形式について提案
している。披露宴の場所を「植物園とか華族会館又は帝国ホテルの如き所を代用するも宜し
からん」³⁰と述べている。

鳩山和夫・春子は、日本で最初の結婚披露宴を挙げた夫婦として知られる。宴は「有名な
築地のすみ屋」で、アメリカ帰りの和夫の提案によりアメリカ風に行われた。新郎新婦の友
人を大勢招き、「南北戦争の時の歌ジョンブル」の合唱をしたという³¹。

また、本書によれば、結婚にかかる費用を、欧米では新婦側の実家が負担する慣例がある

が、日本では両家が折半すればよいと述べている。他方、婚約指輪と結婚指輪の慣例については「我が国にても採用する方便利にして、且^{かつ}楽しからん」³²と述べている。

結婚の時招待する人は祝物の有無に拘泥すべからず。出席せざるも祝物を贈るあり、出席するも祝物を送らざる場合ある可し…かゝる社会の大儀式は到底俄に定まるものにあらず…多数に便宜なる方法が自然に行はるゝに至るべし³³。

祝いの品の有無で招待客を選ばないように、という春子の忠告は、率直で面白い。日本の婚礼の流儀は便宜性や合理性によって今後定まっていけばよい、という柔軟性を示してもいた。

他方、「青年男女の交際」の節で、春子は自由な恋愛や結婚の風潮を批判し、とりわけ、そのような娘を育てた母親の責任を手厳しく問うている³⁴。

漫りに西洋風々々々として突飛にも青年女子より男子に手紙を送り訪問して交際を求むるなど近年往々に見受くる所なるが、驚くべき事なり…之を真の西洋風なりと思ひ誤り、遂に所謂ハイカラといふ卑しむべき流行語を見るに至れり³⁵。

「顰蹙すべき事…最も甚しきは青年男女の交際なり」³⁶とまでいう春子の脳裏には「新しい女」の存在が浮かんでいたに違いない。『婦人の修養』が出版された頃、平塚らいてう(1886-1971)たちの活躍は社会で話題になっていた。他方、一郎の妻になる薫は、養女として春子の薫陶を受け、“申し分のない”娘に成長していた。薫とらいてうは、まさに同世代の女性である。二人は教育を受ける機会に恵まれ、裕福な娘時代を送った、当時のエリート女性である。そのような共通項をもちながら、両者のその後の生き方は対照的であった。

(2) 鳩山春子『模範家庭』(1913 年)

『模範家庭』は元来は、共立女子職業学校・同専門学校の教科書として使うために出版された³⁷。本書はイギリスの家事の教科書 *A Domestic Economy Reader* の翻訳書であった³⁸。本書は人名を日本風に改めている以外は、あえて「西洋風の生活」を読者に伝えている点が特徴である。物語の形式をとる家政学の実用書は珍しい。何よりユニークなのは「妻を亡ひたる一労働者の家庭一年間の歴史」という設定である。

取分けて憐れなるは、家の貧しき事なり、父の俸給は僅かなるに、良太郎が学校の月謝は高く、家賃と暖炉^{ストーブ}に焚く石炭とは、毎月毎日少なからぬ金を凌へ行き…³⁹。

二男四女を抱えた父親「隅田氏」は、薄給の俸給労働者として描かれ、子どもたちと共に

日々の生活に苦闘する。こうした物語の邦題に、春子は“模範”という訳語を選んだのである。

前述したように、同時代の家政書では“家事は妻・母の職分”という見方が根強かった。もちろん『模範家庭』も「^{これ}之より一家を持たんとする若き娘達の為めに」、すなわち結婚前の女性向けに出版されている⁴⁰。しかし原作は、母を亡くした家族が家政を切り盛りする物語であるから、そうした性的役割分業観に必ずしもとらわれていない。また、貧しい中でいかに工夫するかというテーマは、裕福な中産階級の暮らしが前提とされてきた従来の家政書とは、一線を画していた。

(3) 鳩山春子・薫『家政』(1917年)

本書は、上・中篇を春子が、下篇を薫が担当した共著である。初版は1917年であるが、その後1929(昭和4)年時点で32版を重ねるベストセラーとなった。なお、同内容のものが1917年に実業之日本社から『嫁入文庫 家政の巻』として出版されている。嫁入前の女性を主な読者に想定した本である。「嫁入前後の婦女の心得べく実践すべき家政上の一切は、二女史の懇到適切な本書の講話によりて、容易に学得することを得べし」⁴¹とある。

春子は序文で執筆目的を次のように語る。日本の文明は欧米の輸入・模倣時代から過渡期を迎えているがゆえの「障碍」もある。欧米では「女子と雖も、男子と共に、^{くつわ}轡をならべて、あらゆる方面に活動し得る自信を持つ程に進んで居ります」。しかし春子はこれに日本の婦人が「附和雷同」するのを批判する。春子の目指す方向は良妻賢母であった。

私は良妻となり、賢母となり、善良なる一家の主婦となつて、健全なる家庭生活を営む所に在ると信じます。或る人はそれを婦人が男子に対する屈従であるかの様に考へられますが、私は寧ろそこに婦人の尊い一切の価値が発現すると信ずるので御座います⁴²。

こうした春子の男女観は、すでに明治後期に形成されたとみられる。1901年に刊行された『今世女訓』において春子は、「女子学問之目的」として、教育を受けた女性が男女同権を主張する傾向があるが、むしろ「女子には女子丈けの権利がある」「一方に権利のある代はりに亦一方に義務がありますから権利を主張するならば先づ己の義務の如何を省りみなければなりません」と述べたのである⁴³。

このように春子は、女性が男性との対等性を主張することについてやや批判的だが、かといって男性の下に女性を指定するのではない。1903年刊行の『女学生の葉』で春子は、次のように述べている。男性は外の世界で働くので誘惑に陥り易い。これに対して婦人は政治性や党派性に影響されず、正邪を判断する力がある。こうした婦人の輿論の力で、「男女間の品行のみならず、社会一般に対する公共の為め、諸種の腐敗罪惡を穏やかに漸次救済」することが「女性の最も名誉なる天職」である⁴⁴。

1917年の『家政』で春子は、「結婚生活は人より幸福を受くるに非ずして、人に幸福を授ける覚悟が必要」「弱い女が強い男子に寄依して、男子の作り為す幸福の分配を当然受け得るものゝ様に考へて、…誠に憂ふ可きこと」と述べている⁴⁵。男性から受け身で幸福を“与えられる”のではなく、自ら“与える”人になるために女子教育が必要だという。つまり春子が目指す良妻賢母は、男性以上に強い女性でなければ、なり得ないのである。

春子が担当した上・中篇は次のように構成されている。

上篇 第一章 婦人の心得／第二章 姑の心得／第三章 夫の心得

中篇 第一章 姑に対して／第二章 夫に対して／第三章 実家に対して／第四章 親戚知己に関して／第五章 雇人問題／第六章 妊娠／第七章 児童の教養／第八章 日常生活の注意／第九章 不時の災厄／第十章 修養

以下、春子の主張を検討していく。学問は、男子と「対立」するような「特殊の才能」がある婦人だけのものではない。「常識」「中庸」を得るために婦人は教育を受け、絶えず修養を続けなければならない、と春子は婦人の教育の必要性を主張する。それは春子自らの学問修行に裏打ちされたものであった⁴⁶。

本書は、女性の結婚についての考え方を論じている。

結婚と云ふものは、…さう楽しい時ばかりあるものではありません。若し非常に楽しいものだと思ひ込んで居る人があれば、その人は必ず失望するに違ひありません⁴⁷。

春子は、恋愛結婚は相手に対する期待が大きいだけに、かえって結婚後の失望を深めるおそれすらあると述べる⁴⁸。見合結婚にしても半年から2年くらいは交際期間を設けるべきだとする。

日本では約束をしてから余りに結婚の期を急ぐやうな傾がありますが、これは甚だよくないことであります。…天晴れ一人前の主婦として間違のないやうに、準備をさせてやるのが私共の天職であります⁴⁹。

すなわち、「先方の家風を習」うための準備期間が必要だというのが春子の立場であった。実際、長男一郎との結婚前に、薫は私塾プラクマ・ホームに1年半通い、寮生活を送っている。それは春子が勧めたことで、「[嫁を息子の－引用者] 気象に叶ふ様に仕上げやう」⁵⁰という目的によるものだった。

結婚後は夫に対して「愛と敬」をもって接し、「自分の方から折れて行くやうにせねばなりません」。たとえ夫に非があっても、妻から仲直りに持っていくようにと勧めている⁵¹。

また、良妻と賢母はしばしば両立せず、賢母になる方が比較的容易であるという。良妻であっても「感化して善い方に導く」のが困難な餌－春子はこれを「不愉快」「不満足」と評している－と違い、子どもならば母の努力に応えてくれるというのである⁵²。貞操の問題については、たとえ男性が誘惑しても「秋霜烈日の如き貞操」が婦人にあれば「醜怪事」は起こり得ないはずだ、と女性側の非も批判していた⁵³。

春子は、嫁姑問題の最も面倒なのは「中流社会」であると述べている。なぜなら「上流」は嫁と姑は別世帯で生活するからで、「下流」は生活の余裕のなさから不平を言う暇がないという理由からであった⁵⁴。嫁姑問題を起こさないための工夫は、姑が財産を持つことである。夫の死後、財産をすべて子どもに渡してしまうのではなく、姑が時々孫に多少の金を出して補助することによって息子夫婦から大切にされるとアドバイスしている⁵⁵。

ただし、嫁姑の同居の可否について、実生活では、嫁が気を遣わないように自ら別居を持ちかけた（が、一郎の反対で同居となった）⁵⁶といわれる春子であるが、本書では「別居は良策にあらず」と述べる。

その代わり、同居をするなら食事の時以外は部屋を分ける、朝晩の挨拶は声をかける等の適度な距離を保つことを結婚前に約束しておくことを勧めている⁵⁷。

春子が同居を勧める理由は「心の持方で嫁の親友となり、隔意なき相談相手」になれるからだという。具体的にそれは「夫の不品行」の際の相談だと赤裸々に書いている⁵⁸。したがって春子は嫁には「姑を尊敬せよ」「実母と同様」「姑は味方」と心得を説く一方で⁵⁹、姑には「姑根性を去れ」「嫁を信用」せよと説く⁶⁰。

こうした記述は、和夫の女性問題で苦勞した春子の経験に基づくものではないだろうかと筆者は考える。ここに次のような報道を紹介する。

春子夫人の贗物 鳩山和夫氏は真物

法学博士鳩山和夫氏は兩三日前訴訟上の用件を帯びて仙台に赴きたるが如何した拍子なりしか同地にては春子夫人同道との噂バツと拡がり…社交界の花形役者と謳はるゝ夫人の来仙なれば黙過する訳には行かずと愛国婦人会の貴婦人方は内密に歓迎用意をさへ為し居たるに之は又如何したものか鳩山氏が着仙の翌日頃より夫人とは真赤な嘘、御同伴の婦人は春子夫人よりもずっと若く顔かたちも春子夫人以上に麗はし…之とは知らぬ鳩山氏は夕暮になれば早々手に手を取つて散歩に出かけ…余程氏も洒落者なり 但し宿帳に何と書いてあつたか其れを見落したるが残念⁶¹。

和夫に同行していた女性は春子ではなく、愛人だったということを暴露した新聞記事である。この内容が事実であれば春子は、長男と薫が結婚した翌年に、夫からこうした裏切りを受けていたことになる。『家政』を名乗る本書に、一見珍しく思われる「夫の心得」という章を設けているのは、こうした経緯をふまえれば自然の流れと思われる。しかも同章は「男

子の貞操」「間違つた今日の男子」という記述から始まるのである。

男子の中には、その貞操と、家庭の円満と云ふことを考へて居らぬ人が随分あるやうに思はれます。そしてさう云う人は夫たるものは妻よりは権力があり、自由があるべき筈だと考へて居ります。…結婚すれば、婦人の貞操を買つたつもりになり、婦人には厳格にこれを要するも、自分は法律に触れざる限り〔傍点引用者〕不品行を働いても差支へないかの如く思つて居るのですが、これは実に間違つた話で、そんなことで家庭内の平和が保てるものではありません⁶²。

妻には厳しく求められる貞操が、夫にはそうではない。つまり春子は、貞操に関する夫婦の片務性を非難していることがわかる。片務性を解消するために、女性を貞操義務から解放するのではなく、男性にも女性同様の貞操義務があるというのが春子の主張であった。

本書が出版された時、春子はすでに未亡人となっていた。しかし「法律に触れざる限り」のくだりは、法律家であった和夫の、生前の不品行を示唆するようであり、春子の憤りがうかがえる。春子は、日本男性の不品行の原因は江戸時代の参勤交代制度にあるのではないかと述べる。「さう云ふことを行ふことが多いほど、…誇り」とする男性に対し、「婦人に取つて一番辛いことは夫の愛を他に奪はれることであります」。親子の愛と夫婦の愛は異なり、親は子どもが複数いても等しく愛情を注ぐが、夫婦は同時に多数の者を等しく愛することは不可能だと春子はいち切る。夫の不品行は「現世の地獄」「嫉妬の蛇」「呪はれたる家庭」を招来するので、「深く考へて欲しい」と春子は呼びかける⁶³。しかし当時、どれほど多くの男性が家政書を読んだかは疑問である。

私はどうしても、さう云ふことを止めることの出来ないやうな意志の薄弱なる人は、始めから独身生活を送るやうにした方がよいと思ひます。それでも社会に害毒を流すから困りますが、妻や子供を犠牲にしない丈けでも罪が浅からうと思ひます⁶⁴。

不品行を我慢できない男性は、むしろ独身でいるべきだと主張する春子は、他方では亡き夫を賞賛する伝記を出版した⁶⁵。しかし『家政』を読むと、春子の抱えた失望の深さが伝わる。しかし本書で春子は、妻は夫の不品行に対して「沈黙せよ」と勧めるのである。

どうもさう云ふことをする人は、妻が忠告を試みても不品行が治ると云ふ訳には参りません。それに男子は一体に意地の強い者で、口喧しくそれを非難すると、反つて薪に油を注ぐやうな結果となりますから、結局黙つて居る方がよいやうです。黙つて居ると云つても、盲従するものではありません。…自分の方から触れぬやうにするのです。…自分は正当の妻である。…家庭では以前と変ることなく、楽しくするに限ります⁶⁶。

本書で示されるアドバイスは、春子がこれら全てを実践したのではなかろうかと思われるほど具体的である。春子の実母や姑も夫に対して「微笑」をもって接していた、子どもが父親の不品行を知ると尊敬できなくなり、教育上良くないから伝えるべきではない、夫に反省を促したいなら「紙片に書いて、夫の見る書籍の間等に^{そつ}窃と入れて置く」。妻が我慢して夫が自発的に反省するのを待つ方が賢明で、それでも、どうしても我慢ができず離婚を選べば婦人の方が不利益を受け、一層苦勞するだろう、不品行は「病氣」と思えば諦められるだろう、妻は夫を按摩する心得があったほうが良い⁶⁷、等々。

また、男子の育児において「母親は、子供時代から男子でも婦人同様に貞操を重んずることが、自他共に真の幸福であることを教え込」まなければならないと説く⁶⁸。すなわち夫のような男性に息子を育ててはいけない、ということの意味する。では、春子はそのように一郎を育てたのかというと、皮肉にも、のちに薫も春子と同じような目に遭うのである⁶⁹。果たしてこの嫁姑は、実生活でも夫の不品行について相談をし、慰め合っていたのだろうか。本書は妻が辛さを紛らわす方法まで紹介している。ただし、春子は“泣く”ことは推奨しない。

泣いたりするのは自制のできない人のすることです。「涙は婦人の武器也^{なり}」と云ふ時代は過ぎて居ります⁷⁰。

淋しい時には外に出たり、何か清き娯楽を求め、気を変へ、心を広くする…なるべく外に出るやうにするのが良いと思ひます。

有益の書物を読むとか、その他精神的のことに従事して、知識を広め、修養を積み、自ら幸福を作ること…公共慈善の事業等に力を入れる⁷¹。

他方、下篇を担当した薫の序文は、終始控え目で遠慮がちである。執筆を「^{おこ}実に烏滸がましいこと、存じまして、再三御辞退申し上げたのでありますが…」⁷²「私は幼い頃に実母に別れ、…万事自己流でやつて居りますので、他から御覧になれば定めし御笑ひ草になるやうなことも多からうと存じます」⁷²と述べている。

下篇の目次は以下の通りである。

下篇 第一章 収入と支出／第二章 衣食住／第三章 蓄財／第四章 台所、買物の仕方／第五章 贈物／第六章 冗費節減

1912年の時点で薫は、女子教育の重要性について次のように述べている。

女子の仕事の中で育児と云ふ事程重い尊い仕事は御座いますまい 其の育児と云ふことが全然母親の言行や信念に由て其将来を決するのかと思ひますと女子はどうしても吾身

自身を及ぶ丈け完全に近くして置かねばなりません 其には娘時代の余裕のある時に許される丈けの教育を受けて置く…此れが私の娘時代の回想中もっとも深い感想で御座います⁷³。

薫による『家政』下篇は、家計簿のつけかたなど、実用的かつ一般的な家政学 home economics の内容である。

まず特徴的なのは、家計予算の重視である。本書初版が出る頃に薫は、新聞紙上に識者として登場し、次のように述べていた。

そこに主婦の務がある、一国の経済も立派に行ふには完全な予算が必要である如く、家庭にも家庭相当な予算が必要で、自分が立てた案に皆の協賛を得ると云ふ立憲的な家庭を造る…⁷⁴。

のちに、一郎が内閣総理大臣に就任した際のインタビューでも、薫は家計簿の話をしていくことから、家政の中で家計部門を重視していたのだろう。

本人〔夫一郎－引用者注〕は現在、手持ちの金がいくらあるか、借金がいくらあるかも存じないのです。私が結婚当初、家計簿をつけて、大ミソカの日に自慢らしく見せますと、そんなこと信頼してるよといわれ、いささかガッカリしたものでした。さて、そうして任せきりにされてみると、女というものはケチなものでございまして、自分のこととなると半襟一つ買い控えるというものです⁷⁵。

薫は、主婦の小遣は計上する必要がないと指摘する。「家計全体が主婦の小遣のやうなもので、化粧品代は家計全体の被服費や雑費から支出すべきものだ」と述べる⁷⁶。また、“一家の総収入－貯金（全体の1割程度）＝経常費”と定め、その中でやりくりをする必要を説く。薫は「都会に住んで居る、中流の月給取」を標準にして経常費に占める割合を次のように示す⁷⁷。

食物費……35%
住居費……25%
被服費……10%
義務費……20%（税金、教育費、交際費、雇人の給料、図書・新聞費、交通費等）
臨時費……10%

次に、衣食住の中で一番節約すべき項目は衣生活だと薫は主張する。

現今の我国の生活は被服に金が懸かり過ぎると思ひます。衣類は質素にしたからと云つて、決して健康に障るものではありません…生活の余裕を作るのは被服費を切り詰めるのが第一の方法と思ひます⁷⁸。

子どもの衣類は洋服がよい⁷⁹。華美にすれば活発な運動ができず、發育の妨げとなる。女子の場合、白粉をつけたがったりしてよくない。大人でも「家政を熱心に考へる人」は流行から離れるべきだというのが薫の衣生活観である⁸⁰。

家計の中で子どもの貯金は母親が代行し、知己から貰った金などは子どもの通帳に入金し、子どもが成長したら通帳を渡すことを勧めている⁸¹。

台所の使い方や買い物の仕方についての指南もある。一番大切なのは清潔な台所である、商人に騙されず良い品を買う方法、購買組合利用の勧め、浪費を防げ、などの記述が並ぶ。贈り物の仕方について、たとえば病院見舞いに縁起の悪い花を持って行つてはいけないなどの注意もある。

薫の独自性は、返礼についての見解である。返礼の習慣を「つまらぬことだと思ひます」という薫は、礼状や挨拶にとどめ、「人の厚意を甘受する」方が「美しい」と述べる。同様に、心付けの習慣も全廃するべきだとする⁸²。

本書には「冗費節減」「虚飾を去れ」という項目があり、薫の合理性を示している。

宮参りや七五三と云つたやうなものは止めた方がよくはないでせうか。敬神は非常によいことではありますが、生れ立ての嬰兒に、さう云ふことは分りません⁸³。

感冒などの病気にかかる可能性が高い季節に、美しい着物を着せて出かけるくらいなら、その費用を貯金した方がよいと述べている。子どもに派手に着飾らせるのは「畢竟親の虚栄心で、子供を玩弄視して居る結果」と断言する⁸⁴。

1908年、各界著名人500名を招いた一郎・薫の結婚披露宴のニュースは、当時の新聞に写真入りで掲載された。「十一月一日華族会館にて新婚披露式を挙ぐる鳩山一郎氏（二六）と衆議院書記官寺田栄氏の令嬢薫（一九）」⁸⁵。春子が『婦人の修養』で紹介したような披露宴を挙行したのだった。しかし、薫は春子と違って、こうした派手な結婚式に批判的だったようである。薫は「悪習は漸々に除いて行つて、真に力ある、真摯な生活を送り度いものがあります」⁸⁶と『家政』の最後を結んでいる。

このように、薫の下篇は堅実な家政学であり、それは、薫の人となりと矛盾するものではなかった。1930年、犬養毅夫人千代子を会長として、立憲政友会所属議員の夫人を中心とする団体「清和婦人会」が創設された。薫はのちに同会長に就任するが、長年にわたり会を支えた常任幹事の塩原静（1899-1988）は、薫について次のように述べている。

お若いときから、華やかな会合に出られる時も、指輪をはめてをられるのを見たことがありません。どんな大きいダイヤの指輪でもお持ちになれる身分ですのに。…政治家の家計の切り盛りが、せいっぱいで、御自分の身につける着物や、装飾品に心をつかうゆとりが、おありではないのだと思いました⁸⁷。

前述したように本書は、家庭の階層性を上・中・下流と区分し、中流層を目がけて書かれている。「一口に中流社会と申しても、その意味が甚だ漠として居ますが、多少の恒産があり、先づ今日の生活に窮するやうなこともない家庭を中流と想定している⁸⁸。そのため本書は、婦人と社会の接点についても頁を割いた。以下は、春子が政治家の妻・母として、和夫と一郎の選挙のたびに戸別訪問をした経験を想起させる。

交際は妻の職分と覚悟し、宗教や政党の別は問わず、気を広く持つてなるべく多くの人と円滑に交際し、…政治上の意見等は違つて居ても、私交は私交として、美しい交際をし度いものであります⁸⁹。

実は、家政書にみられる家庭の階層性については、本書だけの特徴ではなかった。常見育男は「これらの文献にあげられた家計例は、一般大衆の生活に縁遠い上流階層に近いものがきわめて多い」と述べる。その理由は「教育の対象となったのは都市の上層階層の家庭か、時に、選ばれた者の入学する特殊の学校の子であった。したがって、これらの著作者の念頭にあった家庭は、一般大衆の勤労者家庭ではなく、都市生活の上層階層に近い家庭であったと見てよい⁹⁰」というものであった。春子・薫の『家政』も例外ではなく、雇人や女中が日常的に存在する家庭を前提としている。

また、本書も例に漏れず、そもそも当時の家政書全般が、夫婦と子どものいる家庭を前提とする内容であった。一人暮らし、結婚しない関係、子どものいない夫婦等は、家政書の枠外にあった。

1913年の時点で、「婦人が独立生活を立て、一生を終ると云ふ事は抑^{そもそ}も天理に背く訳で容易の業ではありませんまい」「処女が最終の目的は、他家へお嫁に行くと云ふ事」と春子は述べている⁹¹。それは、“既婚・子どもあり”以外の生き方をする女性への、社会の抑圧を体现していた。

おわりに

本稿では、日本における家政学の草創・発展・普及を“鳩山春子・薫の時代”と捉えて論じてきた。その歴史は、明治文明開化期から昭和戦前期に至る日本近代史と軌を一にしていたといえるし、それはまた本学、共立女子学園の歴史とも重なるものであった。

本稿で詳述した共著『家政』は、「女傑」と呼ばれた春子⁹²の情念すら感じさせる上・中篇と、昭和戦後に「最高殊勲夫人」と呼ばれた薫⁹³による、合理的で地に足のついた下篇で構成され、二人の持ち味の違いが鮮明に出た一冊だった。同時代の家政書の多くが、衣食住生活の技術や知恵を授ける内容だったのに対し、本書は婦人の処世術—家族、とりわけ夫婦関係のあり方や心構え—を説くことに重点がおかれた。したがって、具体的・技術的というよりは、普遍的・内面的な内容だったといえる。その意味では異色の家政書である。

政治記者渡辺恒雄は、春子と薫を「先生と生徒の関係」と評した⁹⁴。まさに薫は、春子の育てた“最高の教え子”であった。薫は『家政』の内容を忍耐強く実践し、良妻賢母の価値観を内面化した。薫の同世代には、良妻賢母ではないかたちでの自己実現を目指した、たとえば市川房枝（1893-1981）のような女性が存在する。他方で、何度も夫の危機を救った薫は、一郎からの感謝と労いと、世間の称賛を受けた⁹⁵。薫にとっては、夫を救済することが、男性への屈従ではない自己実現のかたちであった。それは春子の宿願でもあり、薫は生涯かけてそれを果たしたのである⁹⁶。

『家政』が、大正・昭和戦前期の長年にわたるベストセラーとなったのは、春子と薫による実生活に根ざした率直な提言が、多くの読者の共感と呼んだことを意味する。つまり春子と薫の抱えていた問題は、近代日本の女性たちに大なり小なり共有された、普遍的な問題だったのである。

《注》

- 1 『共立女子学園七十年史』（共立女子学園、1956年）9-10頁、鳩山春子『自叙伝』非売品、1930年、250頁（復刻版は大空社、伝記叢書、1990年）。
- 2 春子は和夫の前妻（死別）の娘 和子も育てた。和子はのちの政友会総裁鈴木喜三郎の妻となった。鈴木は政界で一郎の兄的な存在となった。
- 3 鳩山和夫校閲・鳩山春著『英和対話書』（中央堂、1887年）。
- 4 松永敏太郎『ニコニコ写真帖』（ニコニコ倶楽部、1912年）32頁。他にも横山流星『美人の戸籍調べ 現代評判』（天下堂、1919年）64-67頁。
- 5 薫の鳩山家養女時代については、中河幹子『珠玉の人 鳩山薫先生伝』（日輪閣、1967年）に詳しい。
- 6 春子と薫は当時のメディアである新聞雑誌・書籍に頻繁に登場する有名人だった。たとえば、「鳩山春子夫人」佐瀬得三『続当世活人画 一名 名士と閨秀』（春陽堂、1899年）、「選挙場の三婦人」『東京朝日新聞』1914年6月5日、「薫子さんの敵味方」『東京朝日新聞』1915年6月1日。なかでも『読売新聞』の「よみうり婦人附録」のコーナーの常連だった。たとえば、「女子職業の製作品展覧会」『読売新聞』1917年5月13日朝刊4面。
- 7 「総理大臣をつくった女 鳩山薫夫人」『サンデー毎日』1954年12月26日号。
- 8 鳩山薫の「賢夫人」「内助の功」ぶりを伝える記事は枚挙にいとまがない。たとえば、近藤日出造「鳩山薫」『中央公論』1955年2月特大号、竹内てるよ「鳩山薫子夫人が語る、首相を夫にもった苦勞と喜び」『家の光』1955年5月号、大宅壮一「石橋うめと鳩山薫子」『文藝春秋』1957年2月号、「水爆対談 鳩山一家『政治家は悪人でなければ成功しない』」『週刊読売』1974年1月号、今井久夫「宰相の妻 鳩山一郎夫人 闘病と内助の功ひとすじ 典型的なヤマト撫

- 子・鳩山薫」『月刊ペン』1981年1月号など。
- 9 高橋節子「共立女子大学における家政学の後継者育成——食物学分野の立場から——」『日本家政学会誌』46-9号, 1995年
- 10 常見育男『家政学成立史』141頁。
- 11 辻啓介「家政学を考える 健康科学からみた家政学」『日本家政学会誌』44巻7号, 1993年, 65頁。
- 12 常見前掲書, 179頁。
- 13 文部省編輯局『家事要法』上巻(有隣堂, 1881年)「緒言」。
- 14 同前。
- 15 瓜生寅『通信教授 女子家政学』(通信講学会, 1889年)1頁, 復刻版は『復刻 家政学叢書1 通信教授 女子家政学 第一・第二』(第一書房, 1982年)。
- 16 瓜生前掲書, 1頁。
- 17 瓜生前掲書, 1-2頁。
- 18 瓜生前掲書, 3頁。
- 19 瓜生前掲書, 13頁。
- 20 瓜生前掲書, 13頁。
- 21 常見前掲書, 202頁, 辻前掲論文, 66頁。
- 22 下田歌子『家政学』上(博文館, 1893年)4頁。
- 23 鳩山春子訳『模範家庭 西洋家事読本』(大日本図書, 1913年)「序」5-6頁。
- 24 鳩山春子「結婚は其以前に於て準備が必要である」『風俗画報』1913年2月5日号。
- 25 共立女子学園百三十年史編集委員会『共立女子学園百三十年史』(共立女子学園, 2016年)223頁。
- 26 共立女子学園『共立女子学園七十年史』(共立女子学園, 1956年)72-74頁。
- 27 鳩山春子『婦人の修養』(大日本女学会, 1907年)。
- 28 『模範家庭 西洋家事読本』「自序」3頁。
- 29 『婦人の修養』20頁。
- 30 『婦人の修養』81頁。当時の華族会館の元は鹿鳴館であった。実際にこの本が出版された翌1908年, 薫と一郎の婚礼は華族会館で行われた。
- 31 鳩山春子『自叙伝』84-85頁。
- 32 『婦人の修養』81頁。
- 33 『婦人の修養』82-83頁。
- 34 『婦人の修養』70頁。
- 35 『婦人の修養』66-67頁。
- 36 『婦人の修養』64頁。
- 37 『模範家庭』「序」7頁。
- 38 『模範家庭』の下訳は, 教育者で哲学者の安倍能成(1883-1966)が行ったという言がある。「春子さんは私の妻の母と共に旧い女子師範(後に女高師)出であり, その母は春子さんがのちに校長になった女子職業学校に永く務めて居た。私が妻帯した時, 春子さんは友人の娘の新家庭の乏しさを心配してくれて, 英語の通俗的な家政書の下訳を私にさせたことがあり, 私はその頃しばらく目白の鳩山家に通った。大正の始め頃だったが, その頃一郎氏はまだ東京市会に居たやうだ」。安倍能成「吉田内閣の崩壊と鳩山内閣の出現」『心』1955年2月号, 6頁。
- 39 『模範家庭』7頁。
- 40 『模範家庭』「自序」3頁。
- 41 「新刊紹介」『読売新聞』1917年12月27日朝刊7面など。当時の新聞広告には「嫁入文庫 婦人一生の相談相手 千金に優る嫁入道具 鳩山春子・同薫子先生共著 家政の巻」『朝日新聞』

- 1917 年 12 月 7 日朝刊 1 面とある。他に、『朝日新聞』1917 年 12 月 23 日朝刊 6 面など。
- 42 鳩山春子・鳩山薫子『家政』（共立女子職業学校桜友会，1917 年），復刻版は『復刻 家政学叢書 8 家政』（第一書房，1982 年）。鳩山春子「序」2 頁。
- 43 鳩山春子「女学生注意一班」西川正憲編『今世女訓』（松邑三松堂，1901 年）5-7 頁。
- 44 鳩山春子「婦人の天職」松原岩五郎『女学生の栞』（博文館，1903 年）182 頁。
- 45 『家政』鳩山春子「序」3-4 頁。
- 46 『家政』4 頁。他に，鳩山春子「読書に就いて」『女徳論叢』（愛国婦人発行所，1908 年），鳩山春子女子「読書訓」熊本県立人吉高等女学校校友会『標準婦人文庫良書百種解説』（熊本県立人吉高等女学校校友会，1931 年）。
- 47 『家政』82 頁。
- 48 『家政』69-70 頁。
- 49 前掲「結婚は其以前に於て準備が必要である」。
- 50 前掲「結婚は其以前に於て準備が必要である」。
- 51 『家政』83 頁。
- 52 『家政』7 頁。
- 53 『家政』8 頁。
- 54 『家政』31-32 頁。
- 55 『家政』40-41 頁。
- 56 日本学術新聞編集局『日本の大学・人とその思想 私の足跡 I』（日本学術通信社，1982 年）95 頁，前掲「鳩山薫子夫人が語る，首相を夫にもった苦勞と喜び」など。
- 57 『家政』73-74 頁。
- 58 『家政』48-49 頁。
- 59 『家政』63-69 頁。
- 60 『家政』40-41 頁。
- 61 『読売新聞』1909 年 1 月 18 日，朝刊 3 面。
- 62 『家政』50-51 頁。
- 63 『家政』52-53 頁。
- 64 『家政』56 頁。
- 65 鳩山春子『鳩山の一生』（非売品，昭栄社，1929 年）。
- 66 『家政』87-88 頁。
- 67 『家政』92・96・189 頁。妻がなぜ夫を按摩するのが良いのかについて，春子の説明は率直である。西洋では「無闇に他人に膚に触れさせるやうなことはしません」。しかし，日本では女中に夫を按摩させても平気である。「つまらぬ間違ひも随分かういふところから起りますから…主人の身体には主婦以外の者が容易に触れぬやうにしたいものであります」。『家政』189 頁。
- 68 『家政』56-57 頁。
- 69 一郎に非嫡出子がいたことは，生前から公然とされた事実である。薫の，彼女たちへの冷静かつ親切な対応ぶりがさらなる賞賛を呼んだ。前掲「総理大臣をつくった女 鳩山薫夫人」や「鳩山総理の愛人と落し児」『丸』1955 年 5 月号など。薫の日記には，知人の一人として夫の愛人の名が出てくる。伊藤隆・季武嘉也編『鳩山一郎・薫日記 下巻 鳩山薫篇』（中央公論新社，2005 年）1955 年 8 月 28 日，1956 年 8 月 19 日，9 月 18 日の条。
- 70 『家政』80 頁。
- 71 『家政』46・90-93 頁。
- 72 『家政』鳩山薫「序」1 頁。
- 73 「家庭に立て見た娘時代の修業 鳩山薫子夫人の談」扇谷亮『娘問題』（日高有倫堂，1912 年）195-196 頁。

- 74 鳩山薫「予算は生活の羅針盤 よみうり婦人附録 家計予算の可否 (五)」『読売新聞』1916 年 7 月 20 日, 朝刊 4 面。
- 75 前掲「総理大臣をつくった女 鳩山薫夫人」。このエピソードは『家政』208 頁にも登場するので, 実話と思われる。
- 76 『家政』215 頁。
- 77 『家政』218 頁。
- 78 『家政』227-229 頁。
- 79 しかし, 薫自身は生涯着物で通した婦人だった。前掲「石橋うめと鳩山薫子」など。
- 80 『家政』228-230 頁。
- 81 『家政』237 頁。
- 82 『家政』249-250 頁。
- 83 『家政』252 頁。
- 84 『家政』253 頁。
- 85 『読売新聞』1908 年 10 月 30 日朝刊 4 面, 11 月 2 日朝刊 3 面。
- 86 『家政』254 頁。
- 87 植村和秀「翻刻 塩原静『鳩山薫夫人』」『産大法学』45-3・4 号, 2012 年, 29 頁。
- 88 『家政』31 頁。
- 89 『家政』182 頁。
- 90 常見前掲書, 83-84 頁。
- 91 前掲「結婚は其以前に於て準備が必要である」。
- 92 九百里外史『現代女傑の解剖』(万象堂, 1907 年) 24-35 頁, 前掲「総理大臣をつくった女 鳩山薫夫人」。
- 93 「生きた「最高殊勲婦人」鳩山薫子さん訪問」『読売新聞』1959 年 1 月 21 日, 夕刊 4 面。
- 94 前掲「水爆対談 鳩山一家『政治家は悪人でなければ成功しない』」。
- 95 鳩山一郎「妻を語る」『週刊朝日』1954 年 10 月 3 日号, 同『鳩山一郎回顧録』(文藝春秋新社, 1957 年) など。
- 96 拙稿「鳩山薫夫人 一郎の「足もとを守るひと」として」『鳩山一郎とその時代』(平凡社, 2021 年刊行予定)。

本稿は JSPS 科研費 20K01452 による成果の一部である。

The Age of HATOYAMA Haruko and Kaoru: Focusing on their Home Economics in Modern Japan

Miwa UEDA

This paper attempts to clarify the works and life of HATOYAMA Haruko (1863-1938) and her daughter-in-law, Kaoru (1888-1982). They had been the president and chief director of Kyoritsu Women's Educational Institution. Haruko was mother of Hatoyama Ichiro (1883-1959), who became the Prime Minister in 1954. Haruko was one of the pioneers of home economics, which rose in the Meiji period, and tried to bring up students at Kyoritsu to be "good wives and wise mothers". Kaoru helped Ichiro's political activities in spite of his adversity and illness. Haruko and Kaoru published together the *Home Economics (Kasei)* in 1917, which became one of the best sellers in modern Japan. Haruko wrote 10 chapters on the marriage and family life, and Kaoru wrote 6 chapters on household economy. It was remarkable that Haruko spared 2 chapters for husbands though they rarely read this sort of book then. Haruko warned husbands to keep their chastity and inducted wives into the way to overcome their worry and sorrow caused by misconduct of their husbands. Actually, her bitter experience influenced this book. Therefore, *Kasei* became one of the women's favorite books. Women in modern Japan shared similar problems.